

一つの夢の終焉 ブルキナファソのクーデター(小特集 最近のアフリカ政治の動き)

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1988-03
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008726

一つの夢の終焉

ブルキナファソのクーデター

原 口 武 彦

はじめに

1987年10月15日午後4時30分、ブルキナファソの首都ワガドゥグ、大統領官邸に隣接する協商会議会館で、突如、銃声がこだました。包囲した反乱軍と、ちょうどこの会館に到着したサンカラ大統領および彼の護衛数名との間でたたかわれた銃撃戦は、わずか数分で終息した。死者13名(公式発表)、そのなかにはサンカラ大統領が含まれていた。かくして60年の建国以来、5度目のクーデターは成功した。

『ルモンド』紙(10月18/19日号)の社説が「またもや、アフリカの一軍人がもう一人の軍人を放逐し、ほとんど無関心な民衆にむかって、よりよき時代の到来を宣言した」といまいまじげに論評をくわえているように、クーデターなれしているアフリカのことではあるがこのクーデター成功のニュースは国際的にかなりの衝撃を与えた。それは射殺されたサンカラ大統領が、西アフリカの革新派の政治的指導者として、その言動は常に内外の注目集めてきたからである。あの迷彩色の戦闘服姿に象徴される質素な生活態度と生来の開放的な性格も相俟って、サンカラは大衆的な人気と信頼を勝ちえていた。「青年たち、<声なき人びと>にとっては、トーマ・サンカラは自分たちの偶像となった。希望を失っていた彼らは、彼のなかに希望を見出した。彼らは、自分たちと同じように

感じる一人の男が立ち現われたと思った。……」

(『ジュンヌ・アフリック』誌 10月28日号社説)。しかもこのクーデターを企図し、サンカラを倒し新たに政権の座についたのは、サンカラがもっとも信頼をよせていた「革命」の同志であり、サンカラ政権のもと大統領府つき国务大臣をつとめ第2の実力者とみなされていたコムパオレ大尉であったことが、このドラマの衝撃度を増幅したといえよう。

妻と2人の子供を残して38歳の若さでこの世を去ったトーマ・サンカラは、郵便局の臨時職員として働いていたプール人の父とモシ人の母、8人兄弟という貧しい家庭の第3子として1947年12月ワガドゥグ郊外に生まれた。彼がブルキナファソ国民の前にはじめて華やかに登場したのは、1975年マリとの国境紛争の際、ブルキナファソの軍功に輝く前戦指揮官としてである。以来、昨秋の死去に至るまでの彼の短い生涯は、数々のエピソードで飾られている。

1978年、Pô地区の特殊部隊訓練センターの司令官に任命された彼は、水不足に悩む同地区の住民たちのためにモーターつきポンプを自ら購入して、その請求書を当時の大統領ラミナ將軍のもとに直接おくりつけた。また地区の住民たちを前にして得意のギターの腕前を披露し喝采を浴びることも再三であった。

1981年9月、ゼルボ軍事政権のもと情報大臣に就任したサンカラは、半年後の翌年4月、「人民に

猿ぐつわをはめるものに禍あれ」という捨てゼリフを残して閣外に去る。

1982年11月、クーデターで成立したウェドラオゴ軍事政権の首相に就任した彼は、83年2月、リビア公式訪問から帰国した際、リビア政府が彼の滞在費を全額負担したとあって、出発時に支給された手当を全額、国庫に返納した、などなどである。

1983年5月、ウェドラオゴ政権内の反リビア派との対立から首相を解任されたサンカラは、8月4日クーデターに成功し「革命」政権の座についたが、それ以後の4年間もサンカラ政権の諸施策は常に内外の注目を集めてきた。

彼はまず、これまで政府の高官が使用していたベンツやクーラーつきのリムジンを処分し、大統領自身はもとより閣僚も、黒塗りの「R-5」というルノーの大衆車を使用することにさせた。政府高官も、外国出張の際はエコノミー・クラスを利用することとし、外国滞在手当は1日1万5000 CFAフラン(邦貨換算、約7500円)に切り下げられた。国家公務員の職務手当は一切廃止された。

国際婦人年にちなんで、ウィーンで売春婦の世界大会が開催されたとき、サンカラ大統領は連帯の挨拶を送った世界でただ一人の国家元首であった。

サンカラ政権の施政をもっともよく象徴しているのは、1984年8月4日、「革命」1周年に際して行なった国名の改定である。オート・ボルタ(上ボルタ)という植民地時代から継承した国名にかえて制定されたブルキナファソという国名は、「高潔な人」を意味するモシ語「ブルキナ」と「祖国」を意味する「ファソ」というジュラ語から合成されたものである。「高潔な人の祖国」とは、まさにサンカラの国造りのイメージを象徴するものであった。またブルキナが彼の母の母語モシ語であり、

ファソは父の母語プール語に近いジュラ語からとられていることは、単なる偶然であつたろうか。

サンカラ政権が打ち出した一連の「禁欲政策」にもかかわらず、ブルキナファソ経済は一向に好転の兆しをみせなかった。

国内の棉産業にかつをいれるため、国家公務員(女子は除く)には、1987年1月から国産の綿布で仕立てられた民族衣裳(ファソ・タファニ)の着用が義務づけられた。同1月末から、製パンには、輸入小麦粉に国内産メイズ粉を5%混ぜて使用させることになった。また2月には、腐敗防止人民委員会が設置され、政府高官に対する査問が開始された。2月19日、第1回の委員会には、まずサンカラ大統領自ら査問をうけ、彼は自分と自分の妻の所得と貯金額を公開した。彼は、8億5000万 CFAフランの現金と乗用車の贈与を援助供与国(この国かは不明、*Quarterly Economic Review*, 1987年 第2号、28ページ)からうけたことを認めたが、現金は国庫に託し、乗用車は政府機関に引渡したことを示す証拠書類が存在すると主張したという。

サンカラ政権が実施してきたこのような一連の「革命」的諸施策に対して、今回のクーデターを企図したブレーズ・コムパオレは、サンカラ大統領の腹心の部下としてその推進に協力してきた。

ブレーズ・コムパオレはサンカラより2歳年下、1951年2月生まれのモシ人で、サンカラと同じく職業軍人の道を歩み、78年、モロッコのラバトにある落下傘部隊センターで約6カ月間の養成訓練をうけたとき、やはり同じ訓練に参加していたサンカラに出会った。以来、今回のクーデターに至るまでの9年間、2人は文字どおり兄弟のような同志的連帯に結ばれ、行動をとともにしてきた。

1982年4月、ゼルボ軍事政権下で、サンカラが情報相を解任されたとき、コムパオレは彼に対する連帯を表明して歩兵第3連隊長の要職を辞した。

1983年5月、ウェドラオゴ軍事政権下で、サンカラが首相を解任され逮捕されたとき、Pô地区の特殊部隊の司令官であったコムパオレ大尉は、政府に対して公然と反旗をひるがえし、これがサンカラ政権を誕生させる8月「革命」の引き金となったのである。

サンカラ大統領は、生前スイスのテレビ局の記者のインタビューに答えて、コムパオレについて次のように述べている（『ルモンド』紙 10月18/19日）。

「ブレーズ・コムパオレ、彼は非常に聡明で繊細な男である。たとえば、われわれが会合をもったとする。多数派が一つの決定を要求する。私はそれに反対する。少数派の立場におかれることは、私にとって一つのドラマである。そんな場合にブレーズが口をはさむ。必ずしも私の意見に賛成でないときでも彼は私の立場に立ち、私を支持する。なぜなら彼は、私が誠実で確信にみちていることを知っているからである。私は非常に多くのことを彼と共有している。もしいつの日か私が彼と別れなければならなくなったら、それはとても悲しいことだ。……

ある日、人びとが完全にとり乱して私に会いにきて言った。『ブレーズは、あなたに対するクーデターを準備しているらしい』。彼らは全く動転していた。私は彼らに答えた。『ブレーズが、私に対するクーデターを準備していることを、あなたがたが知ったとき、それに反対したり、それを私に知らせにくる必要はないだろう。それでは遅すぎるし防ぎようがないということだ。彼は私について熟知しているので、私を攻撃しようと思えば、私を彼から守れる人は誰もいない。彼は、あなたがたが知らない私に対する武器をもっているのだ。』

このような2人の強い絆を断ち切ったものは何であったのか。

クーデターのおこるちょうど1週間前に開かれた「革命民族評議会」（CNR）の会合は、新たに制

定する憲法の性格について激論が闘わされたという。サンカラ政権の中核をなす4人の実力者のうち、サンカラを除くコムパオレ、リングニ防衛相、アンリ・ゾongo経済相は、あくまで軍主導の一党制体制を主張したのに対し、サンカラは一党制に反対し幅広く前衛的諸勢力を「革命」推進のために結集する体制を構想していたという。クーデターがおこった10月15日午後8時には、この意見の対立を調整するために革命民族評議会の一構成要素である軍部だけの会合が予定されていた。コムパオレは、この会合の席上でサンカラがひそかに自分を含む3人の実力者の逮捕を計画していたことを、彼らのクーデター決行の直接的理由としてあげているが、真偽のほどは今となってはわからない。

サンカラ政権がきわめて革新的な性格を内外に印象づけていたために、今回のクーデターを反革命として位置づけ、それに西アフリカの保守派の橋頭堡とみなされている隣国コートジボワールの介入があったことをにおわす見解が、国際ジャーナリズムに流れた。その代表的なものは、『ジュンヌ・アフリック』誌のマダカスカ生まれのS・アンドリアミラド記者のそれである。彼はサンカラ大統領と個人的に親交関係にあった。

コートジボワールが今回のクーデターに関与していたという推理は、1985年にコムパオレが結婚した彼の妻シャンタルの父がフランス人との混血のコートジボワール人であるという事実から出発し展開されている。

「1985年の結婚以来、彼の近親者たちはブレーズ・コムパオレに対し、彼が1983年8月4日のクーデターを指揮しトーマ・サンカラに権力を与えたことは誤りであったと、くりかえし説いた。彼は永久にナンバー・ツーで終わるだろうと、彼の耳元で囁いた。彼らはついに説得に成功し、トーマ・サンカラがすべてを独占

し、ブレーズ自身は大統領のかげにすぎないと彼に確信させるに至った。1987年9月（のちに8月と訂正）末頃、サンカラの地位を奪うという考えが彼のなかに根づき、それをかくせなくなった。その時期、彼はCNRの書記長ピエール・ウェドラオゴとともにアビジャンを訪問している。その言に反して彼は単独でウフエ・ボワニ大統領と会見した。しかもそれははじめてではなかった。（中略）その間、友人たちはトーマ・サンカラのもとにきて、『ブレーズは、巨額の資金を準備し、忠実な部下を募っている』といった。……」（『ジュンヌ・アフリック』誌 11月4日号）。

コートジボワールが関与したという仮定のもとに、推測に推測をかさね、しかも直接的な表現はさけ、読者にそのことを暗々裡に感じとらせる、その意味ではきわめて狡智なこの記事は、コートジボワール政府当局を激怒させた。党政政治局のコミュニケとして、政府機関紙『フラテルニテ・マタン』紙に反論を掲載するとともに、建国以来「報道の自由」を誇ってきたこの国ではじめて、ジュンヌ・アフリック社発行のすべての定期刊行物を無期限発禁処分とした。

今回のクーデターについてコートジボワールの関与をにおわす情報が流され、それに対してコートジボワール政府が強硬な措置にでた背景には、ブルキナファソ、コートジボワール両国のぬきさしならぬ関係がある。経済的に繁栄するコートジボワールには、100万を超えるブルキナファソ人が流入し滞在している。コートジボワール政府が何

よりも恐れたのは、彼らのこの事件に対する反応であったものとおもわれる。

コムパオレ政権成立後すでに数カ月。新政権はサンカラ政権を誕生させた1983年8月4日の「革命」の意義そのものは否定していない。ただその後の4年間に、「変節者」、「革命の裏切り者」、「神秘主義的独裁者」が犯した誤りを「修正」し、「革命」をさらに推進することを新政権の使命として掲げている。

今回のクーデターは実質的に反革命を意味しているのであろうか。最近では、革命の祭司としてのサンカラの呪力は効力を失いつつあったともいわれる。それかあらぬか熱烈な大衆的支持に支えられていたはずのサンカラが殺されたにもかかわらず、民衆の抗議運動は、少なくとも表面的には発生していない。サンカラを支持していたブルキナ人エリート層の間で、外国滞在者を中心に「サンカラ民主人民連合」と名の組織が結成されたと伝えられるが、この組織がサンカラ同様の大衆的支持をえられるかどうかはわからない。

いずれにしろサンカラはもはやこの世にない。サンカラの軍人にしては温和な明るいやや間のびした横顔にくらべ、いかにも毅然としてすきのない冷徹なコムパオレの顔写真をみていると、とにかくブルキナファソで一つの祭りのときが、終焉したことを感じさせずにはおかない。「高潔な人の祖国」の受難はこれで終わるのだろうか。

（はらぐち・たけひこ／地域研究部）